



心理臨床家における専門的知識の利用過程--施設内の心理臨床に関して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭認知科学研究会 公開日: 2013-12-09 キーワード (Ja): キーワード (En): Interview, Domain-Specific Knowledge, Dialog 作成者: 河内, 哲也, 齊藤, 恵一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2759

心理臨床家における専門的知識の利用過程*

～施設内の心理臨床に関して～

河内哲也 斉藤恵一

Use Process of Domain-Specific Knowledge in Psychological Clinician

～About Clinical Psychology in the Institutions～

Tetsuya KOCHI Keiichi SAITO

要旨 : The present study investigated experimentally how therapists process information expressed verbally by clients and how they obtain information not expressed verbally. Participants were required to think aloud during reading two passages with and without components mentioning psychological disturbance. They were also required to recall the sentences in the passages. The data indicated that the more clinical experience the participants had, the more knowledge and capability to process information not expressed verbally by clients. The result suggests that it is important to understand handicapped people for therapists in any institutions to have many clinical experiences.

キーワード : Interview, Domain-Specific Knowledge, Dialog

1. はじめに

本研究では、面接場面における対話に注目し、心理臨床領域に関して熟達している心理臨床家が、クライアントから言語により明示的に与えられる情報をどのように処理するのか、そして、言語表現には現れないが援助をする上で重要な役割を果たす情報をどのようにして得るのかを調べる。本稿では、心理臨床領域の中でも特に施設領域における心理臨床家の知識の利用過程に着目することとする。

さて、クライアントとは、何らかの問題を抱えて関係機関へ訪れた人、つまり来談者のことを指し、広義の意味では、社会福祉領域において援助を有する者全般を指す(松村・三省堂,1999)。このような定義から、施設領域において心理臨床家が扱うであろうクライアントは、施設内入所者はもとより、地域で生活しているが何らかの発達的な障害を有する人、さらには発達的な障害を有する人の親族などと考えられる。

1.1 面接

面接とは、心理臨床家がクライアントの発した言葉を理解し、クライアントの病態や感情

*本研究の一部は、2002年日本心理学会において発表された。

などを適切に理解する場である。さらに面接は、クライアントの態度や表情、行動の直接的観察から得られる多くの情報、言葉で聞きたいことを聞き、意図に沿った内容を引き出すこと、この2つを相互に関連させながら相手についての確かなデータを収集して、妥当な判断を得る場であると考えられる。

1.2 言語理解と知識

一般的に人間はどのような過程で、言葉を理解しているのでしょうか。このことについて、言葉の理解は知識を適用する過程であるという見解がある（阿部・桃内・金子・李,1994; Winograd,T.,1983）。話し手が発した言葉を、受け手は、その話し言葉から意図や目標を引き出すために、自分自身が持っている様々な知識を利用して、認知的処理を行う。このように、人間が言葉を理解する過程は、知識に大きく依存していると言える。さらに深く見れば、知識の量や質、そしてその知識の使い方に依存しているとも言えよう。すなわち、一般的に人間は、ある刺激（言語情報）から、ある情報（その言語情報の意図や目標）を得るためには、自分自身の様々な知識を用いるといえよう。

1.3 熟達者の情報処理機能

熟達者の情報処理機能の研究は多くなされており、Wineburg,S.(1998)によると、熟達者は、特定領域内での知識を獲得しているだけではなく、その領域に関する知識をうまく構造化しており、その領域で使用する既有知識を適切にうまく利用する、つまり効率よく、適切に知識を利用できるとしている。すなわち、熟達者は、特定領域において、直面した事象に効率よく対処することが出来るいえよう。

さて、特定領域における熟達者の読みに関しても、熟達者とそうでない人との理解の仕方が異なることが示唆されているが、Zeitz(1994)は、初心者と、各領域の熟達者に詩と短編小説、科学論文の3種類を読ませて、逐語再生率と要点再生率から文章記憶と解釈や推論について調べている。逐語再生では、すべて熟達者が優れているわけではなかった。しかし、要点再生では、初心者より熟達者のほうが各専門領域の文章において優れていた。この結果から、特定領域における熟達者は、その専門領域の文章を理解する中で、文の表象的意味はもとより、より深い意味までもうまく形成できることを示しているといえる。

以上の熟達化に関する見解から、心理臨床領域の熟達者である心理臨床家においても、専門領域に関する構造化された知識があると考えられる。専門領域といえる面接場面では、クライアントの状況を全体的に捉え、特定の問題に関して臨機応変に対応できると考えられる。言い換えれば心理臨床家は、適切にクライアントの心の状態を理解することができ、クライアントの現段階の問題点をより多く、より適切にとらえることができるのではないだろうか。さらには心理臨床家はクライアントの表現した情報から暗とした情報を取り入れたり、クライアントを理解するための不足する情報がある場合には、より効率的に必要な情報を獲得することができるのではないかと考えられる。

1.4 認知心理学的にみた面接の構造

以上に述べた事柄を踏まえて、認知心理学的に面接の構造を考えていくと、次のように見ることができる。

面接が始まる段階では、心理臨床家には、クライアントに関する情報はまったく存在しないと仮定する。そこから、心理臨床家は、クライアントとの言葉のやりとり（対話）を通じて、クライアントがどのような問題を抱えているのかを探るであろう。この過程について詳しく考えてみると、心理臨床家は一つのクライアント像を構築するために、はじめの段階では、自分が利用できる知識をすべて活用するであろう。その後、クライアント像がある程度固まってくると、そのクライアント像に関する知識および関連する知識だけを利用し、無関係な知識を利用することはないであろう。その過程では、心理臨床家は、必要な情報を得るための質問を適宜、クライアントに対して発し、それに対する答えにより、さらにクライアント像を固めていくであろう。

2. 目的

本研究では、面接場面での心理臨床家におけるクライアントの理解過程を以下のように予測し、それらを実験により検討する。

心理臨床家は、面接場面において、クライアントの不完全な言語情報からクライアントを適切に理解しなければならない。そのためには、不完全な言語情報に隠された、暗とされている情報をも読みとり、クライアントをより適切に理解しなければならない。つまり、暗とされている情報に関してより多くの心理臨床領域における専門的知識を利用することで、クライアントをより適切に理解していると考えられる。また、心理臨床家は、不完全な言語情報から得られた様々な情報が、クライアントを適切に理解しているかどうかを吟味し、もし適切にクライアント像を把握するには情報不足であると思えば、把握するのに必要な情報を適宜、得るであろう。さらに、心理臨床家はクライアントから得られら情報を統合していき、効率よくクライアントの状況を総合的にとらえることが可能であると考えられる。

実験では、被験者に、心理的な問題に言及した文章とそうでない文章の二つを呈示し、発話思考法による発言や、それぞれの文章に対する再生を求めた。そして、被験者の持つ知識の程度と文章読解中の処理との関係を検討した。

3. 方法

3.1 被験者

大学の学部学生14名と大学院生6名と心理臨床家5名の計25名を被験者とした。被験者は、心理臨床に関する知識の程度によって、学部学生二年生群、学部学生四年生群、大学院生群、および心理臨床家群の4群に分けられた。

3.2 実験材料

実験材料として臨床的文章と非臨床的文章の二つの文章を用いた。臨床的文章はDSM-IV (1996)を参考に作成され、心理臨床の場に訪れるクライアントの述べるであろう事柄に言及

Table 1
実験で用いた刺激文章a

臨床的文章

僕は、親とは離れたところで一人暮らしをしている学生です。最近気分的に、すごく沈んだ感じがして、何に関しても面白くありません。なにをやるのにもやる気がおきなくて、何をしても楽しめません。こんな自分をだめだと思うのですが、どうすることもできません。だから最近、大学に行くことすらできずに、家に閉じこもっています。毎日、だらだらと生活をしているので、部屋の中はすごく汚れています。しかし、部屋を掃除しようという気も起きずに汚れたままです。1日中、布団から出ないこともしばしばあります。また最近、誰か尋ねてくるのが怖くてたまりません。寝ているときも、少しの物音で、すぐに目がさめてしまいます。誰かが、僕を狙っていると思いついてしまいます。そのことがものすごく恐怖で、不安で、いっぱいです。だから、ほとんど寝ることができずに、毎身体調が優れません。こんな感じが、もう2ヶ月ぐらいも続いています。こんな状態が続くのなら、死んだほうが楽になれるのだろうなとも思います。

非臨床的文章

私は先日、デンマークという国に行ってきました。デンマークにはさまざまな風車がありました。そのため、ほかのエネルギーへの転換を迫られたのです。風車は、自然エネルギーとしてすごく大きな可能性を秘めています。デンマークに風力発電が広がったのは、1970年代の石油危機からです。日本と同様、アラブ原油へほぼ100%依存していました。そのため、ほかのエネルギーへの転換を迫られたのです。現在では、デンマークの総電力の16%を風力でまかっています。特に風力への期待は高く、2030年に50%の目標を掲げました。風車はビジネスでも成り立ちます。農産物、医薬品に次ぐ輸出製品で、世界の風車の半分がデンマーク製といわれています。風力発電が人気となった理由はいくつか考えられます。石油の節約や風力のコスト低下、さらには地球環境への関心の高まりです。風車建設のある担当者は、環境への対価をあとで払う必要がない、といいます。地球温暖化は、未来の人たちを激しく損傷するものとなるでしょう。

a臨床的文章、非臨床的文章とも15文で427文字である。

したものとなっていた。一方の非臨床的文章には新聞記事の一部を抜粋したものをを用い、心理的な問題に触れるものとはなっていなかった。実験で使用した二つの刺激文章をTable 1に示す。

3.3 計画および実験課題

実験は2（刺激文章要因）×2（読み要因）×4（知識の程度要因）からなる。刺激文章要因、読み要因ともに被験者内要因であり、知識の程度要因は被験者間要因である。読み要因とは、本実験において、読みが制限されている状況と読みが制限されない状況の2つである。読みが制限されている状況とは、文章を一文ずつ読むペースが実験者によって制御され、しかも読み返すことができない状況のことである。

一方、読みが制限されていない状況とは、文章を一文ずつよむペースが被験者にゆだねられ、自由に文を読み返すことができる状況のことである。被験者はこれらの状況のもとで、文章を理解するように指示された。読みが制限されている状況における文章理解課題を「内容把握課題①」とし、読みが制限されていない状況における文章理解課題を「内容把握課題②」とした。読みの制限がされた内容把握課題①では3.8秒間隔で文章が一文ごとに呈示された。内容把握課題①では、実験者により、読みが制限されているために、文章内容からあまり情報を得ることができない状況であると考えられる。しかしながら、内容把握課題②では、読みが制限されないのので、文章からの情報を制限なしに読み取ることができると考える。これら、各課題において被験者に要求されることは、できる限り文章の内容を把握することであった。また本研究では、知識の利用過程について検討していくために、内容把握課題②の試行中でのみ、自分が考えていることをすべて声に出してもらって発話思考法を行った。さらに本実験では、被験者がどれくらい命題以上の意味を取るかを検討するために、各課題のあとに予期せぬ形での再生課題が実施された。再生課題前には、リハーサル効果を防ぐために、妨害課題として引き算課題が実施された。引き算課題の内容は、100から3ずつ引き算をしていくものであった。再生課題は自由再生により、また筆記再生により実施された。また読みが制限されていない条件では、発話思考課題も実施された。

本実験で被験者に要求されることは、呈示される文章を一文ずつ読み、そこに記述されている人物の心理的な問題点をできるだけ詳しく理解することと、このときに考えていることをすべて声に出して述べるということ、そして、再生課題において、呈示された文章を正確に再生することの3点であった。

さて、発話思考法とは、被験者に対して、人工的な状況の中で、課題を与えて、課題を達成する間に頭に浮かんだことを全て声に出して語らせる認知心理学的な実験手法の一つである。この方法で得られたデータは、語りのもつ特徴や限界を踏まえて適切に用いるならば、心的な現象を研究する際の重要な方法のひとつであるとされている(原田,1993)。また発話思考法は人間の理解過程を解明する研究において多用されている(安西,1980; 綿井・岸,1988)。このように、人間がどのような理解をしているのか、すなわちどのような心的過程により物事を理解していくのかを解明する一手段として適切であると考えられる。そこで本研究では、面接場面における心理臨床家の被験者の心的過程から、心理臨床家の利用過程について検討するために、発話思考法を用いることとした。

3.4 手続き

被験者には、カウンセラーとしてクライアントにはじめて面接する場面を想像し、呈示される文章がクライアントの発言と考えて、それらの内容を理解するよう求められた。各文章は、一定の時間および間隔で一文ごとに読む条件と、被験者が自由なペースで一文ごとに読み進めてゆける条件の二つの条件で呈示された。各条件とも、文章は一文ずつコンピュータ・ディスプレイ中央に呈示された。二つの条件のうち、自分のペースで読み進めていける条

Table 2
命題「僕は気分的にすごく沈んだ感じがする」における各反応カテゴリーの発話例

反応カテゴリー	発話例 a
命題程度の理解発話	気分的に沈んだ感じがするんだー。
命題以上の理解発話	沈んでるって、うつっぽいのかな、引きこもってる感じがする。
疑問的発話	何で気分が沈んでるのかなー、何でだろう？
沈黙	・・・(一秒以上、発話出来ずに考え込んだとき)
理解不能	何でこんなこと言うのか分からないなー
分類不能	(どの反応カテゴリーにも合致しない発話)

a括弧内は分類に関する説明である。

件では、被験者は一文を読み終えるごとに、そのとき頭に浮かんでいることをすべて声に出すよう求められた(発話思考法)。また、各条件で文章の呈示が終了するごとに、文章に対する再生課題が行われた。これらは二つの刺激文章に対して行われた。

4. 結果と考察

発話思考法に失敗した被験者8名(学部学生6名と大学院生2名)のデータは分析対象外とした。また、本稿では、発話プロトコルデータのみを分析対象とした。発話プロトコルデータは、命題(文の伝える基本的な意味)ごとに、命題以上の理解発話、命題程度の理解発話、疑問的発話、沈黙、理解不能、および分類不能の計6個の反応カテゴリーに分類された。反応カテゴリーへの分類例をTable 2に示す。

刺激文章ごとに、各群における各反応カテゴリーの占める割合を算出した。このデータの分析は、データが比率であるため、反応カテゴリーごとに χ^2 分布を利用した2要因(知識の程度×刺激文章)の分散分析を行った。その結果、命題以上の理解発話、疑問的発話、沈黙の三つの反応カテゴリーに関して何らかの有意さが得られた。

4.1 命題以上の理解発話

命題以上の理解発話の割合に関して、刺激文章×知識の程度の交互作用が有意であった($\chi^2(3)=8.76, p<.05$)。この交互作用に関する単純主効果の検定では、学部学生四年生群と心理臨床家群についての刺激文章の効果が有意であった(順に $\chi^2(1)=5.00, p<.05$ と $\chi^2(1)=18.97$ で、ともに $p<.05$)。学部学生四年生群と心理臨床家群において、刺激文章が臨床的文章のときには、非臨床的文章よりも命題以上の発話の割合が高いことが示された。命題以上の発話は、命題程度の意味の理解に基づいてなされた推論内容を反映するものと考えられる。

したがって、専門的知識の程度が高くなるにつれて、クライアントからの明示的な言語情報を読みとりながら、さらに明示的な言語情報に隠された、暗とされる情報をも得ているといえる。つまり、暗とされる情報は、クライアントを援助する上

で重要な役割を果たしており、心理臨床領域の熟達者は、その情報へ多くの知識を利用していることが示唆された。

4.2 疑問的発話

疑問的発話の割合に関して、知識の程度の主効果が有意であった ($\chi^2(3)=36.02, p<.01$)。知識の程度の各水準に関してライアン法による多重比較を行った結果、大学院生群と学部学生四年生群、心理臨床群と学部学生二年生群、そして大学院生群と学部学生二年生群の間に関して主効果が有意であった (順に $\chi^2(1)=11.20$ と $\chi^2(1)=19.66$ と $p<.\chi^2(1)=30.20$ で、それぞれ $p<.05$)。心理臨床家群と大学院生群は、学部学生四年生および学部学生二年生群よりも疑問的発話の割合が高い傾向にあることが示された。

専門的知識の程度が高くなるにつれて、面接場面において、ただクライアントの言語情報から、クライアントの情報を把握しているだけではなく、自らが得たクライアントの情報は、クライアントをどれだけ適切に理解しているのかに関しても、多くの知識を利用していることが示唆された。つまり、心理臨床領域の熟達化が進むにつれて、様々なクライアントにおける枠組みを持ち、クライアントの言語情報を受け取った時点で、ある程度のクライアントの状況を予測することが可能になるのであろう。これにより、自らが予測したクライアント像を、より適切なクライアント像へ近づけるには、どのような情報が不足しているのかに関しても知識を利用し的確に判断しているといえよう。このように、心理臨床領域の熟達化が進むにつれて、より適切にクライアント像を把握出来るのであろう。

4.3 沈黙

沈黙の割合に関して、知識の程度の主効果が有意であった ($\chi^2(3)=50.57, p<.01$)。知識の程度の各水準に関してライアン法による多重比較を行った結果、学部学生四年生群と心理臨床家群、学部学生二年生群と心理臨床家群、学部学生四年生群と大学院生群、学部学生二年生群と大学院生群の間に関して主効果が有意であった (順に $\chi^2(1)=18.10$ と $\chi^2(1)=18.98$ と $\chi^2(1)=23.82$ と $\chi^2(1)=43.41$ で、それぞれ $p<.05$)。沈黙は、文を読んでも、文の事柄について何も考えられなかったか、あるいは考えるのに時間を要したことを示している。すなわち、クライアントの言語情報からクライアント像を理解する際に、うまく知識を利用できなかったことを示しているといえよう。この結果は、心理臨床に関する専門的知識が多くなると、それだけその知識を利用したの推論がなされやすくなることを示したものであるといえる。

このことは、心理臨床領域に関する熟達化が進むにつれて、クライアントから得られた様々な情報から、クライアント像を把握するために、必要最低限の知識を利用して、効率よく、また適切にクライアント像を記述していることを示唆するものである。さらに必要最低限の知識を利用できることは、心理臨床領域に関する熟達化に伴って、知識の体制化がなされているともいえよう。

4.4 施設領域における熟達者のあり方

施設領域の指導や療育に関しては、他の領域に比べて、経験的な知識のみ頼わざ

るを得ない部分が多くある。しかしながら、本研究の実験結果や考察から見ると、経験的な知識つまり手続き的知識は必要だが、それだけではなく机上で得た知識、つまり宣言的知識を常に獲得していく必要がある。これにより、より新鮮な手続き的知識を獲得でき、しいては、今まで以上に知識の体制化を増進させることにつながるといえよう。

ここ十年間で施設領域の心理臨床は大きな変貌を遂げているといえる。様々な研究者や臨床家は、米国から様々な有効的療育手段を我が国に紹介している。しかしながら、このような新鮮な知識を獲得せずに、古い知識のみで、今後の指導や療育を続けていくなれば、施設全体の発展は望めないであろう。これから先は、熟達者に対する教育的アプローチも視野に入れて、熟達者における新鮮な専門的知識の向上をはかる必要がある。このような熟達者への教育アプローチを考える上でも、施設領域の熟達者が障害児者やそれを取り巻く人々をどのように理解しているのかを認知的な実験により解明していくことが重要である。今後の認知研究に期待する。

引用文献

- 松村 明・三省堂 1999 大辞林-第二版- 三省堂.
- 阿部純一・桃内佳雄・金子康郎・李 光五 1994 人間の言語情報処理-言語理解の認知 科学-サイエンス社.
- Winograd, T. 1983 *Language as a cognitive process*. Volume 1: syntax. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Wineburg, S. 1998 Reading Abraham Lincoln: An expertise/novice study in the interpretation of historical texts. *Cognitive Science*, **22**, 319-46.
- Chiesi, H. L., Spilich, G. J., & Voss, J. F. 1979 Acquisition of domain-related information in relation to high and low domain knowledge. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **18**, 257-273.
- Zeitz, C. M. 1994 Expert-novice differences in memory, abstraction, and reasoning in the domain of literature. *Cognition and Instruction*, **12**, 122-312.
- アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) 1996 DSM-IV精神疾患の診断・統計マニュアル(American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and Statistical manual of mental Disorders*, Fourth Edition(DSM-IV). Washington D.C., American Psychiatric Association.)
- 原田悦子 1993 プロトコルデータの収集方法 海保博之・原田悦子 (共編) プロトコル分析入門-発話データから何を讀むか- 新曜社 Pp. 79-92.
- 安西祐一郎 1980 問題解決における理解について 心理学評論, **23**, 1, 7-36.
- 綿井雅康・岸 学 1988 児童の文章構造の知識の分析について-プロトコル分析による検討- 聴覚言語障害, **17**, 3, 89-100.

執筆者紹介

河内哲也

所属：北海道立太陽の園 発達援助センター

Email：tkouchi@pop16.odn.ne.jp

専門分野：認知心理学，臨床心理学，発達障害

斉藤恵一

所属：北海道医療大学心理科学部

Email：ksaito@hoku-iryo-u.ac.jp

専門分野：言語心理学